

北に一星あり

—小樽商科大学の発展をめざして—

第 二 集

1995年 3 月

H7

北に一星あり

地獄坂を登りつめると、「北に一星あり、小なれどもその輝光強し」とうたわれた小さな大学、小樽商科大学がある。

商学部の単科大学であるが、専門4学科を整備した実質的には社会科学系の総合大学であるといえる。21世紀を目前にしたいま、建学の理念をふりかえりつつ、「小なれどもその輝光」をより強くするよう本学の発展をめざす。

「北に一星あり－小樽商科大学の 発展をめざして－」第2集の発刊にあたって

学長 山田家正

平成3年度から取り組み始めた本学の自己点検評価作業は、2年間半の議論と作業の末に平成5年度に自己評価報告書「北に一星あり－小樽商科大学の発展をめざして－第1集」として結実した。

この第1集では、理念の再構築の必要性、将来構想の早期立案、各学科系の問題点、教育課程の改編に関する諸問題、国際交流事業の今後の課題、経済研究所の改組計画、教育に関する学生の意見についての認識と対応策など、未だ具体的な形には表れないものがあるにせよ、本学の諸課題の指摘と解決に導く方向性の示唆が得られたと思う。本学の自己点検・評価活動の基本原則は自主性、公開性、活用性である。この3原則のうち、自主性と公開性については所期の目標を達成したと判断されるが、最も配慮すべき活用性の達成度は第2集あるいはそれ以後で問われることになる。

第1集の発刊後、自己評価委員会をはじめ各実施主体には休むことなく膨大な時間を費やして第2集の編集作業に取り組んで頂いた。内容的には、第1集では対象に出来なかった項目あるいは第1集で早期解決が指摘された項目が挙げられている。この点検評価作業を行なう過程で出された様々な論議、指摘が、結果的に従来慣行として疑問もなく行なわれていた日常的な作業の見直しに繋がったケースもある。報告書は作業結果のまとめとして重要な意味をもつことは当然であるが、その作業過程がいかに重要であるか再認識させられる。同時に、報告書の行間に隠された一歩後退二歩前進の作業エネルギー量の大きさを見過ごすことはできない。研究時間の確保をどのようにしたら可能かという検討に、研究時間を費やしている構図は苦悩多き大学の実態を象徴するパロディーでもある。

しかし、我々はこの作業を形式的に、軽々に扱うわけにはいかない。一過性の問題でもない。自主性、公開性、活用性の3原則に加えて、「継続性」を持たせることが大学の発展に不可欠であることを再認識したい。困難な作業に積極的に取り組んで頂いた教職員各位に感謝申し上げて第2集の刊行にあたっての言葉とする。

北に一星あり

—小樽商科大学の発展をめざして—



平成6年12月1日
小樽駅前～小樽商科大学バス路線開通



平成6年12月15日
附属図書館増築



平成6年3月30日
第3講義棟新設

目 次

第 1 章	概 要	1
第 2 章	本学の教育理念	2
第 3 章	商業教員養成課程の現状分析と課題	4
第 4 章	入試方法の改善	13
第 5 章	研究活動の学科等別評価	23
	1. はじめに	
	2. 経済学科	
	3. 商 学 科	
	4. 企業法学科	
	5. 社会情報学科	
	6. 一般教育等	
	7. 言語センター	
第 6 章	研究活動の個人評価	57
	はじめに	
	経済学科	
	商 学 科	
	企業法学科	
	社会情報学科	
	商業教員養成課程	

一 般 教 育 等
言 語 セ ン タ ー
保 健 管 理 セ ン タ ー
外 国 人 教 師

第 7 章 各種委員会の機能と構成 140

1. 総 論
2. 予 算 委 員 会
3. 教 務 委 員 会
4. 学 生 委 員 会
5. 図 書 委 員 会
6. 人 事 委 員 会
7. 将 来 構 想 委 員 会
8. 施 設 整 備 委 員 会
9. 自 己 評 価 委 員 会
10. 研 究 報 告 編 集 委 員 会
11. 国 際 交 流 委 員 会
12. 入 学 試 験 委 員 会
13. 教 育 課 程 等 検 討 委 員 会

第 8 章 事務組織と運営 191

1. 概 要
2. 事 務 局
庶務課, 会計課, 施設課
3. 学 生 部
教務課, 学生課, 入学主幹
4. 附 属 図 書 館
事務部

第9章 附属施設の運営 206

1. はじめに
2. 附属図書館
3. 視聴覚教育施設〔言語センター〕
 - ・視聴覚教育施設運営委員会
4. 保健管理センター
 - ・保健管理センター運営委員会
5. 情報処理センター
 - ・情報処理センター運営委員会

第10章 本学の教育設備の問題点 242

～教室環境改善アンケート調査の集計及び分析～

あとがき 272